

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：24405

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13514

研究課題名（和文）家族介護者のメンタルヘルスに関する研究 医療経済学的視点による実証分析

研究課題名（英文）A Study on the Mental Health of Family Caregivers-Empirical analyses from the Approach of Health Economics

研究代表者

牛 冰 (NIU, BING)

大阪公立大学・大学院経済学研究科 ・准教授

研究者番号：90756363

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、家族介護者のウェルビーイング（メンタルヘルスや主観的認知）に着目し、その実態を明らかにしながら、要介護者（高齢者）の満足度等に影響する社会経済的要因を明らかにする。また、家族介護における外部支援の経済評価を行う。具体的には、日本の個票データを用いて、1）介護サービスに対する要介護者の満足度、2）家族介護者、とりわけ、ヤングケアラーに着目し、彼らのウェルビーイングに影響する要因、3）ヤングケアラーにおける外部支援の影響について明らかにする。研究結果をもとに、家族介護で多大な負担を抱える介護者およびその介護による影響を受け得る高齢者に対する適切な支援を提供する政策立案に資するといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療経済学分野においては、家族介護を受ける側としての要介護者の生活や満足度に着目する研究が少なかった。その点において、本研究は新規性があり、学術的独自性と創造性があるといえる。日本の個票データを用いて、高齢者の介護に対する満足度を定量化することは、介護者と高齢者に対する支援のあり方に関する政策提言に貢献できるだけでなく、国内外の学術分野においても貴重な文献の蓄積となる。また、社会的関心が集まるヤングケアラーの問題に関する学術的エビデンスが、彼らの支援に関わる政策立案に貢献すると考える。同じ問題を抱えている諸外国にとって、日本を対象にした本研究は国際比較に貢献する重要な参考資料になると考える。

研究成果の概要（英文）： In this study, we focus on the well-being of family caregivers such as their mental health and subjective cognition, clarify their actual situation, while examining socioeconomic factors that affect the satisfaction of those requiring care including older adults. We also examine the impact of the role of external support in family caregiving.

By applying individual data from Japan, we mainly examine the following three research questions: 1) the satisfaction of those requiring care with nursing care services, 2) the factors that affect the well-being of family caregivers, particularly young carers/caregivers, and 3) the impact of external support on young carers/caregivers.

The results of this study contribute to policy making to provide appropriate support to caregivers who bear the heavy burden of family caregiving, and to older adults under their care.

研究分野：医療経済学

キーワード：家族介護者のウェルビーイング 要介護者の満足度 ヤングケアラー 外部支援の経済評価

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在の新生児が成人を迎える 2040 年ごろ、団塊ジュニア世代が高齢者となり、日本の高齢者人口の割合は 35% に達する (国立社会保障・人口問題研究所による推計)。日本では、従来高齢者の介護は主に家族によって担われてきたが、核家族化や家族介護者の高齢化など家族をめぐる状況に変化が現れたことを背景に、それまで家庭内で担ってきた介護の負担を社会全体で支える仕組みとして 2000 年に介護保険制度が導入された。

近年、社会全体の労働力が減ってきている中、人手不足で倒産している民間の介護サービス業が高水準で推移している。現在でも、多くの要介護者の主な介護者は家族であり、家族が抱える介護の負担は決して軽いものではない。警視庁の自殺統計の集計結果によれば、2014 年から 2018 年の 5 年間に「介護・看病疲れ」を動機とした自殺者数は 1,176 人に上る。

このような介護の課題に向き合うには、公的介護保険だけでは限界があり、家族による介護の役割が必要不可欠である。医療経済学分野では、これまでは公的介護保険制度における様々な政策の効果を実証研究によって明らかにされてきたが、家族介護においてはその実態を明らかにするものが少なかった。既存の研究の多くは、家族介護を行うことが介護者の就労行動や健康状態などに与える影響に注目してきたが、介護者本人の精神・健康・就労などの状態が最終的にその介護を受ける者に及ぼす影響については十分明らかにされていないといった状況について解明することが、本研究課題の核心をなす学術的「問い」である。

日本やアメリカの個票データを用いた既存の実証研究では、家族介護者の健康 (主観的健康感、うつ病・ストレスの度合い等) の低下が要介護者の心身の健康に負の影響を与えることが明らかにされてきた[1][2]。そこでは、要介護者に及ぼす影響として、主に健康面に関して検証されてきたが、彼らの生活の質や生活満足度などにも着目する必要がある。

このような問題意識に基づき、応募者はこれまでに、日本の家計に着目し、「メンタルヘルス (精神状態の良さ)」をテーマに実証研究を行ってきた。具体的には、「国民生活基礎調査」などの個票データを用いて、ランダム実験の設定を再現するなどの計量経済学的手法で、精神疾患を抱える患者の存在が家族員の就労行動と健康に与える影響を明らかにした[3]。それらの知見をもとに、本研究では、家族介護者のウェルビーイング (メンタルヘルスや主観的認知) に着目し、その実態を明らかにしながら、要介護者 (高齢者) の満足度や生活の質に与える社会経済的要因を明らかにする。さらに、家族介護における外部支援の経済評価を行う。

参考文献

[1] Yuda M, Lee J. Effects of informal caregivers' health on care recipients. *The Japanese Economic Review* 2016; 67(2): 192-210.

[2] Ejem et al. The effects of caregiver emotional stress on the depressive symptomatology of the care recipient. *Aging & Mental Health* 2014; 19 (1): 55-62.

[3] Niu B, Zhang L. The Burden of Mental Illness and Mental Distress on Family Members. *The Journal of Mental Health Policy and Economics* 2020; 23(1): 3-17.

2. 研究の目的

本研究の目的は、家族介護者のウェルビーイング（主観的認知やメンタルヘルスなど）に着目し、その実態を明らかにすることともに、要介護者（高齢者）の満足度などに与える社会経済的要因を計量経済学的手法によって検証することである。具体的には、日本の個票データを用いて、1）介護サービスに対する要介護者（高齢者）の満足度、2）家族介護者、とりわけ、ヤングケアラーに着目し、彼らのウェルビーイング（主観的認知など）に影響する要因、3）ヤングケアラーにおける外部支援の影響、について明らかにする。研究結果をもとに、家族介護で多大な負担を抱える介護者およびその介護による影響を受け得る高齢者に対する適切な支援を提供する政策立案に資するといえる。

先述したように、医療経済学分野においては、介護制度や家族介護者の負担に関する研究が主に行われてきた一方で、家族介護を受ける側としての要介護者（高齢者）の生活・満足度に着目する研究が少なかった。その点において、本研究は、新規性があり、学術的独自性と創造性があるといえる。日本の個票データを用いて、高齢者の介護に対する満足度を定量化することは、介護者と高齢者に対する支援のあり方に関する政策提言に貢献できるだけでなく、国内外の学術分野においても貴重な文献の蓄積となる。また、社会的関心が集まるヤングケアラーの問題に関する学術的エビデンスが、彼らの支援に関わる政策立案に貢献し、同じ問題を抱えている諸外国にとっても、日本を対象にした本研究は国際比較にも貢献する重要な参考資料になると考える。

3. 研究の方法

各研究課題に取り組む具体的な研究方法は、以下通りである。

テーマ1：介護サービスに対する要介護者（高齢者）の満足度

- 情報公開申請によって入手した「堺市高齢者等実態調査（2019）」の個票データを用いて、Non-respondent Bias を考慮するために、Inverse Probability Weighting 及び Heckman 二段推計型モデルに基づいて推定を行った。
- まず、第1段階では、要介護者の介護リテラシーが、ケアマネジャーの満足度において、評価を行うことに与える影響を明らかにした。介護保険制度や介護施設および介護ニーズなどに関する知識・情報に基づいて、高齢者の介護リテラシーを測る指標を作成し、高齢者のリテラシーの実態を明らかにした。
- 次に、第2段階では、評価を行った要介護者において、彼らの介護リテラシーは評価の内容、とりわけ、ケアマネジャーに対する6つの側面（「専門性」、「情報提供」、「説明力」、「コミュニケーション力」、「対応力」、「態度やマナー」）に与える影響を明らかにした。

テーマ2：ヤングケアラーのウェルビーイングに影響する要因

- 日本全国のヤングケアラーを対象にウェブアンケート調査（「ヤングケアラーに関する調査（2021）」）を実施し、ヤングケアラー816名の個票データを得た。分析では、まず、ヤングケアラーの主観的認知（ケアに対する肯定的反応と否定的反応のそれぞれ）について、イギリスで開発された国際指標 PANOC-YC20 を用いて点数化し、その点数によって一般のグ

グループとハイリスクグループに分類した。

- 次に、家族のケア役割の3つの側面（「ケアの対象」、「ケア負担」、「ケアへのサポートの利用状況」）において、PANOC-YC20 指標の平均値の差の検定を行った。
- さらに、回帰分析では、肯定的反応と否定的反応の点数およびハイリスクグループに属しているか否かのダミー変数を被説明変数として、最小二乗法とプロビットモデルを用いて推定を行った。その結果を、PANOC-YC20 を活用したヨーロッパ諸国の先行研究と比較し、日本との差異について考察した。

テーマ3：ヤングケアラーにおける外部支援の影響

- 日本全国のヤングケアラーを対象としたウェブアンケート調査（「ヤングケアラーに関する調査（2021）」）から得られた個票データを用いて、ヤングケアラーの負担の実態、「ヤングケアラー」としての自覚、外部支援の利用状況と効果などについて検証した。
- まず、家庭内における労働力の配分に関する経済理論（Becker's (1981) Theory）に基づいて、ヤングケアラーの家計における労働力配分について分析を行い、彼らの負担のあり方や外部支援の効果について理論的仮説を行った。
- 次に、家族のケア負担を測る指標として、1) 家族に提供している介護・世話の種類の数、2) ケアをしている割合（時間的、金銭的、労力的などを総合的に含めた割合）、3) 主ケアラーかどうか、の3つのメジャーを用いて、ヤングケアラーの負担の実態を明らかにし、それに影響する個人属性、家庭内要因や外部支援の影響を明らかにした。
- 最後に、「ヤングケアラー」としての自覚の状況や、自覚を高めるための外部支援の役割について検証し、結果に基づいて考察した。

4. 研究成果

それぞれの研究課題で得られた研究結果の概要は、以下通りである。

テーマ1の研究結果として、1) 要介護者の介護リテラシーは、ケアマネージャーに対する6つの側面（「専門性」、「情報提供」、「説明力」、「コミュニケーション力」、「対応力」、「態度やマナー」）における評価に対して、正で有意な影響を与えた。2) 担当のケアマネージャーの満足度に関しては、「説明力」と「態度やマナー」の2つの側面に対して、要介護者の介護リテラシーが彼らの満足度に有意な正の影響を与えた。3) 年齢、性別、家族構成、要介護度、ケアマネージャーを選んだ理由、介護サービスの利用状況、調査票の回答方法などの共変量もそれぞれ、要介護者の評価プロセスに有意な影響を与えていた。

本研究は医療経済学会が主催した「医療経済学会第16回研究大会」にて口頭発表（査読付）を行った。また、研究論文として、査読を経て国際学術雑誌（*International Journal of Environmental Research and Public Health*）に掲載された[2023年1月]（URL: <https://www.mdpi.com/1660-4601/20/3/2456>）。

テーマ2の研究結果として、1)本調査で対象としたヤングケアラーにおいては、ケアに対する肯定的反応の平均点数は8.805点、否定的反応の平均点数は5.382点であった。ハイリスクグループには、調査対象者全体の18.6%が分類された。2)最小二乗法を用いた分析においては、ケアの対象、ケアの負担、外部サポートの利用状況、家庭の経済状況やヤングケアラーの交友関係によってPANOC-YC20指標の点数に有意な変化が見られた。3)ケアの対象や家庭の経済状況に応じて、ヤングケアラーがハイリスクグループに分類される確率も有意に変化したことが明らかになった。

本研究はEuHEAが主催したPhD Student-Supervisor and Early Career Research ConferenceにてPoster Presentation(査読付)で報告した。また、第82回日本公衆衛生学会総会にて一般演題(査読付)で口演した。さらに、研究論文として、査読を経て学術雑誌『医療経済研究』に掲載された[2023年10月](URL: https://www.ihep.jp/wp-content/uploads/Vol.35_No.1_2023_3.pdf)

テーマ3の研究結果として、1)日本のヤングケアラーが抱えているケア負担が大きいことが明らかになった。ケア負担に対して、家族構成や同居家族の人数、実際受けた家族以外の支援が有意に影響を与えた。2)現状として、ヤングケアラーが実際抱えているケア負担と「ケアラー」としての自覚には大きなギャップが存在していた。3)外部支援とのかかわりがヤングケアラーとしての自覚に有意な影響を与えた。

本研究は第15回「実証的なモラル・サイエンス」研究集会にて口頭発表した。また、国際共著論文として、査読を経て国際学術雑誌(*Economics Bulletin*)に掲載された[2022年12月](URL: <http://www.accessecon.com/Pubs/EB/2022/Volume42/EB-22-V42-14-P188.pdf>)

本研究は、アメリカ合衆国マサチューセッツ大学の公衆衛生学分野の研究協力者(Lingling Zhang, 理学博士)との国際共著論文であり、当初の研究計画においては、家族介護者のメンタルヘルスを促進する支援プログラムの経済評価を行うため、日本・アメリカ・中国における国際比較分析を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて、海外渡航などの制限により、計画の遅延が一時的に生じたが、本研究の最終年度末(2024年3月2日-12日)にマサチューセッツ大学ボストン校に学術訪問し、本研究について口頭発表し、意見交換とともに、今後の国際プロジェクトの立ち上げの準備を行った。アメリカでもヤングケアラーの問題が注目されるようになり、支援対象者としていかなる支援を行うべきか、社会調査の実施に基づいた分析を通して、支援プログラムの有効性について経済評価を行っていく。

さらに、本研究の知見を活用しながら、堺市が行われたヤングケアラー実態調査(2023)のデータ分析や報告書作成に協力した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Jinhan Wang, Ziyang Wang, Bing Niu	4. 巻 11
2. 論文標題 Empirical Analysis of Preferences of Older Adults for Care Facilities in Japan: Focusing on Household Structure and Economic Status	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 345-352
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/healthcare11131843	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 王子言、牛 冰、山野 則子	4. 巻 35
2. 論文標題 日本のヤングケアラーのケア役割とケアに対する肯定的・否定的反応の関係 国際指標PANOC-YC20を用いた実証分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 医療経済研究	6. 最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24742/jhep.2023.03	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Wang Ziyang, Fukayama Kaori, Niu Bing	4. 巻 20
2. 論文標題 Does Long-Term Care Literacy Matter in Evaluating Older Care Recipients' Satisfaction with Care Managers? Empirical Evidence from Japanese Survey Data	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 2456-2456
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph20032456	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Niu Bing, Zhang Lingling, Kano Shigeki	4. 巻 42
2. 論文標題 An Empirical Analysis of Young Carers in Japan: "Care Burden" versus "Awareness" and the Role of External Support	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Economics Bulletin	6. 最初と最後の頁 2279-2297
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 林 萍萍、山野 則子、牛 冰	4. 巻 72
2. 論文標題 コロナ禍における日本の若者の行動変容に関する探索的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 社会問題研究	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ziyan Wang, Kaori Fukayama, Bing Niu	4. 巻 2022-1
2. 論文標題 Impact of Long-term Care Literacy on Satisfaction with Care Managers of Formal Care among the Older Adults in Japan	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Discussion Paper New Series Osaka Prefecture University	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 牛 冰
2. 発表標題 Circumstances Surrounding Young Carers in Japan
3. 学会等名 APRIA (The Asia-Pacific Risk and Insurance Association) 27th Annual Conference (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 王子言
2. 発表標題 Effects of Family Caregiving Roles on Young Carers in Japan: An Empirical Analysis Applying the International PANOC-YC20 Instrument
3. 学会等名 EuHEA (European Health Economics Association) PhD Student-Supervisor and Early Career Researcher Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 王子言
2. 発表標題 日本のヤングケアラーのケア役割とケアに対する肯定的・否定的反応の関係
3. 学会等名 第82回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 牛 冰
2. 発表標題 ヤングケアラーにおける実証分析
3. 学会等名 第15回「実証的なモラルサイエンス」研究集会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 王子言
2. 発表標題 The impact of long-term care literacy on preference toward future long-term care services among older adults
3. 学会等名 第15回「実証的なモラルサイエンス」研究集会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	張 玲玲 (Zhang Lingling)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	深山 華織 (Fukayama Kaori)		
研究協力者	王 子言 (Wang Ziyan)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of Massachusetts Boston		